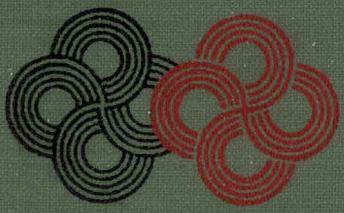

三のしるべ＝藤井高尚
好古日録＝藤貞幹
好古小録＝藤貞幹
茅窓漫録＝茅原定

22

日本随筆大成

第一期

吉川弘文館

日本随筆大成　第一期　第十一巻
昭和三年二月廿五日発行
編纂者　日本随筆大成編輯部
　　代表　早川純三郎
発行者　吉川半七
発行所　日本随筆大成刊行会

日本随筆大成
〈第一期〉22
昭和五十一年五月三十一日　印刷
昭和五十一年六月　十五日　発行
編　者　日本随筆大成編輯部
発行者　吉川圭三
発行所　株式会社　吉川弘文館
〒113　東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三―九一五一〈代表〉
振替口座東京〇―二四四番
製　作＝株式会社　たんちょう社

解　題

本集には、三のしるべ、好古小録、好古日録、茅窻漫録の四種を収める。

三のしるべ　三巻

藤井高尚（ふじいたかなお）著

本書は初学の士の指針として著者の草した和学入門書である。先ず「道のしるべ」が文政七年（六十一歳）に成り、同九年に「歌のしるべ」及び「文のしるべ」が成った事は、巻頭の著者の「とりすべていふ事」によって知られる。

「道のしるべ」は、師本居宣長の直毘霊による所であるが、天津神の御教より説き起し、只道ばかりでなく教もあった事を陳べ、従って礼も存していたとする。然し徒に儒仏を排撃する事はしていない。

「歌のしるべ」には、歌は何の為に詠むかと云う根本問題から出発せねばならぬとしている。歌は詞によって表わされるが、普通に詞を使う場合は理を主としているが、情を主として表現する時は必ずしも理にばかりこだわらぬ所に文との違いを説いていると思われる。又詞と調との関係については、詞は雅に美しくをかしきを選ぶと云い、詞調なほざりならず、と説いている。当時の歌壇は小沢芦庵のただこと歌の説も漸く下火となり、今景樹の調の説が盛んの時代に入って行った時である。高尚と景樹とは互に確執もあり。高尚の意見は、調は歌の姿余情をしめていうもので、これ情詞の外ならずと云っている。而してつまる所は、歌の姿は古体近体と分けて、古今集を中心とした歌調と云う

事になっている。而して歌学研究の諸家に就いて一応触れる所があり、歌道入門書として十分利用価値があったと思う。

「文のしるべ」　文は語ることとは違い、多くの人に、後の時代にまでも誤りなく云うべき事をも伝えるのが眼目であるから、筋が通ってこころ得べき様に書かねばならない。而して文にも二種類あり、古文と中古の文の姿があって、古文は専ら祝詞、詔詞を手本とすべく、中古の文は伊勢物語、源氏物語を範とすべしと其の寄る所を示している。然し伊勢は簡に過ぎ、源氏は繁に過ぎ、初学には入り難いから、師鈴ノ屋集の文詞の部、橋本稲彦の紫文製錦、片岡徳の言葉の花がたみなどがよかろうと、手引草を紹介し、文かきのしりおくべき事ども、せうそこ文、歌の詞がき等数条の注意を加えている。最後の「物語ぶみさうし日記どものさだめ」は、高尚の文章論でありまた文芸論でもあり、注意すべき一文である。「道のしるべ」は文政七年、「歌のしるべ」と「文のしるべ」は翌々九年に成り、文政十二年、都の書肆蛭子屋市右衛門（城戸千楯）等に依って刊行せられた。活字本としては「歌のしるべ」だけは、『続日本歌学全書』三、『校註和歌叢書』七に収められているが、「三つのしるべ」としては旧刊『日本随筆大成』一期十一巻のみである。本書再刊に当っては、国会図書館蔵刊本を比校本として校合を行った。

藤井高尚に就いては本大成本二期二十二巻「松の落葉」の解題に小記したのを見られたい。

好古小録　二巻

藤原貞幹（ふじわらていかん）　著

著者は金石考古の学を好んで蘊蓄する所が多かった。此を金石・書画・雑考に分け百八十二条とし、考説を加え、附録として二十有余の図を加えている。序は橋本経亮が寛政六年六月に草し、平安の鷦

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

鷄惣四郎等の手に依って刊行せられた。本書は随筆と云っても、気楽に読み進めると云うものではなく、考古資料集の様な感があって、其の道の人には大いに重宝とされた事である。刊本は諸所の図書館等にても見られるが、活字本としては『続史籍集覧』四、『日本芸林叢書』三、『日本随筆全集』六及び本大成一期十一巻等に依って流布されている。これらの中で日本芸林叢書本は善本で、狩谷棭斎等の註記があって、大いに後人の為に利する所がある。例えば巻頭の「大宝元年敕書所」用内印及大学寮印」の頭註には、「是敕書疑ハシ」とある。河内国石河郡形浦山碑の頭註には、「古川躬行云、妙見寺近年廃亡シテ今僅ニ其土塀ヲ存ス。明治七年彼地ニ至リテ此碑ヲ捜索スルニ、土人所在ヲ知ラズトイフ。」威奈大村墓誌銘には、「躬行云、コノ銅合子今四天王寺中中ノ院ニ在リ。」註記を一つ一つ抄すると限りがないから、もう一つ、橘逸勢書の註記を記して終いとしたい。これには「屋代輪池云、逸勢朝臣書ハ伊都内親王ノ願文ニハアラズ。藤原平子朝臣ノナリ。」此等に依っても、同好の学者に一応尊重せられた事が証せられよう。

本書再刊に当っては、主として内閣文庫蔵の寛政七年刊本に依って校合を施した。

好古日録　二巻

藤原貞幹　著

本書も小録に次ぐ貞幹の尚古随筆であるが、本書は、「秦璽」から始って「相感」に至る百十九条である。本書も亦名家の愛読珍重した事は、亦『日本芸林叢書』三に依って知られる。其の書記を挙げると、第十七、古本の条に、

春秋左氏伝第十　右左氏伝云、頼業手沢ノ本ニシテ云々、とある頭註に、

寛政二年山田以文ノ家ニテ観ル。押小路外史ノ家蔵ナリ。

又、蒙求全一巻　貞和已前ノ本、又手跡紙色ヲ詳ニスルニ、七百年已上ノ本タル疑フベカラズ。其註、諸本ト合ズ。

頭註に、「鵬斎云、其註諸本ト合ズトアルヲ以考ルニ、疑ラクハ旧註蒙求ナラン。」

二十、古刻柳韓文俗称界板の頭註には、

篁墩曰、曾テ此本ヲ見シニ、巻末応永七年博多僧某校点シテ題字アリ。是ニ因テ遡リテ考レバ嘉慶元年ナラン。

望之近日活字本正宗記ヲ獲。兪良甫ノ題ニ次テ云、寛永七年庚午九月吉日板行畢ルトナリ。是兪良甫ガ古板ニヨツテ活字セル時記スル所ナリ。古板原本ヲ不見、活字本ヲ以テ兪良甫所訓トス。故ニ丁卯ヲモ寛永四年ナラント思ヘルナリ。

百四、俗語の条の頭註には、

保孝按、貞幹好古ノ僻アリテ博識ナレドモ、師承ノ学ナカリシコト、此一条ニテシラル。タヤスク筆ハトルマジキモノゾ。

等とある。吉田篁墩、岡本保孝等、何れも専門の立場から、その瑕瑾を尤めているのである。

椛斎書入本によって、本書の内容の一部を垣間見たのであるが、終戦後に一時騒がれた漢委奴国王印なども逸早く本書に報じられている。

なお本書には、貞幹自筆の初稿本（本文三十二枚）とも云うべきものが残っていて、今静嘉堂文庫に珍蔵されている。先ず眼をひくのは其用紙である。黄蘗色に染め抜いた十行二十字詰の原稿用紙である。今は殆んどが焦茶色に変色してしまっているが、所々鮮かなうす黄色の残っている所もある。この用紙の裏の欄外に「愛日窓」の印が捺してある。巻頭第一枚の下の方に、「左京藤原」「貞幹蔵書」「藤原」「貞幹」

山田

の印記が見えるのは、弟子の山田以文に本書が帰したことを物語るものであろう。その黄蘗色のわくの中に、きちんと文字の書かれているのは掬すべき味がある。さて此の本を初稿本とするのは、内容順序に異同があって、朱筆で刊本の順が註記されて居り、書入等も見えるからである。一見して丹念な著者の人柄が忍ばれる思いがする。刊本には見出し得ぬ良さを感じさせる一本である。只本書には刊本にある寛政八年の藤原資同の序文はない。

本書再刊に当っては、内閣文庫蔵版本によって校合を施した。

藤原貞幹　普通藤貞幹と称せられている。其の略伝は山田以文が其の著「白首猶抄」十一巻に、

先生姓藤原、諱貞幹、字子冬、号無仏斎又蒙斎、称叔蔵。平安人。其先蓋出于吾二十一世之祖云。敦敏博古最精典章、所著天智天皇外記。延暦儀式帳考証注并図、楽制通考、七種図考、書学指南、集古図、逸号年表、好古日録、小録等。文務簡捷而証拠甚確、寛政丁巳八月十九日以疾終。享年六十六。無嗣。先生雅尚実学、不好釈氏。因別号無仏。門人藤原以文礼葬于神楽岡東足云。文化十年八月十九日

正三位行権中納言兼右衛門督藤原朝臣（日野中納言資愛卿）、、、、、、撰　御厨子所預従五位上行少監物紀朝臣宗孝書

とあるのに依って見る事が出来る。貞幹は狩谷棭斎、広瀬蒙斎、立原翠軒、小宮山楓軒等当時の京都に遊ぶ学者の案内役を務め、其の方面の同好の士も多いが、京都でも其の方面の第一人者で、天明八年正月の大火に其災が宮庭にまで及んだとき、裏松光世は其の復古の事に務めたのであるが、その光世卿の手紙に、廿年来の考索の図及び考証が御役にたつと貞幹に報じて、共々に慶を表している事が蒙斎手簡にある。蒙斎の学問の実学であったよき例である。又国学の方面では、天明元年著の「衝口

発」が本居宣長の目に留り、忽ち「鉗狂人」の反論を喚起し、次いで上田秋成の「鉗狂人評」が草されるなど、同じ古代研究を努める人々の間に、互に見る所の相違に依って論戦が布かれる事である。此れは人により、時代により止むなき事である。而して、日野竜夫氏の卓抜なる論文「偽証と古代学」のうちに論ぜられている。決して貞幹も過去の一学者として葬り去られてはいない事である。然し過去に於ける功績も認めらるべきであろう。藤貞幹については左記の研究書がある。「藤貞幹について」吉沢義則（『芸文』十三巻八―十六）、『藤貞幹書簡集』三村清三郎著、『藤原貞幹の業蹟』川瀬一馬著、「藤貞幹稿本摹本目録」伊藤整（『文献』十三号）、「藤原貞幹の国学備用と閲史大疑」川瀬一馬（『かがみ』十三号、大東急記念文庫）、「偽証と古代学」日野竜夫（『文学』四十三巻十）。

茅窻漫録　二巻

茅原虚斎（ちはらきょさい）著

本書には文政十二年の自序があって、著者は幼年の頃から、群書渉猟の癖があり、永年の間に反故雑りの小冊子が出来た。文化丁卯（四年）の頃、書肆が乞うままに貸し与えたら、二三年の後に尾張に漫録が写本三冊本として世に行われていたと云う。乙亥（十二年）東都書肆が写本は改竄の本なれば、ここに版に彫事（エル）をすすめたので、更に編みてつかはしたとある。写本として行われた事は、内閣文庫にも一本存し、大田南畝の「壬申（文化九年）掌記」（木村三四五編『叢余稿叢』所収）にも、

○茅窻漫録　文化丁卯之冬　平安　茅原定書序也。長州医隠茅原定トモアリ。昆陽漫録ノ如キモノ也。……二月十二日、会津藩一柳氏直陽珍珠社にて所見。

とある。然し今一般に流布している版本は、天保四年仲秋発行とある江戸岡田屋嘉七……皇都橘屋嘉助等の本であろう。此れは上下二巻四冊本である。

本書の内容は、著者自ら群書を渉猟すると云うだけあって、和漢の書に通じていて、儒医として世に認められていた人だけあって、自ら本草のことにわたり、惺窩、羅山、徂徠、丈山等を語り、伊豆那・舎利バサル・中神金神等を説いたり、如何にも江戸随筆の雑多な内容を思わせる。下巻の末の方には、皇国の古書よりする講舌が多い。

刊本の外に、写本の流布した事を陳べたが、写本の内容と刊本の項目とは差異のある事が甚しい。今此れを補う暇を欠くため、左記写本の目録を掲げたので、其の大様を知っていただきたい。

茅窻漫録写本目録〔*は版本に掲載なきもの〕

上　巻

駅路鈴　啐喙　二絃　郁子　仏法僧鳥　柏*高麗　宋*帝御押　与*力同心　韃*靼兜鍪　六波羅寺額　選*挙学風幷二先生像惺窩徂徠　戻摺幷鷸草　蘓*沈良方　蓋*頭　舎利鮓答幷バサル　法*螺　雨前茶　青*嚢　鎌来由　秦*武陽　吉備公印幷菅公印花押　逐*鹿　女*房　天*平正平革　稗*官　逸暦　冬*節　ワレカラ　飲*食入脾

中　巻

刀圭　人*死留名　阿*蘭陀象棋子　サフラン　丈山歌　大織冠像幷印　孟*子逸句幷梧桧　武*家十一統易*理　澄泥研　カタクリ　紫服　偏傍　火車　幟*鈴　磁*石　織工　月桂　印*花押秀吉印信長花押　ザウカン鬻幷百舌百千鳥　浪*人　井*露　叫*子　支*離疏　二*人書　神農祭　匕*首　烟草　皮枕幷隠嚢　呉*音漢音

下　巻

四百余州　焦*尾琴　武家月代　先*言寒嗔　古*印　検地　狂*歌　秦*璽　小*硯函　庭忌草　男*女厄年　木*塩　挙*子称職　顕*微鏡　金神幷大歳　飛鳥寺銘幷砂箔泥薄　吐*虹法　上*大人　胎*穆行弟　戢*角印　初

午　花称（版本は木花桜）孟子　鳳凰栖軽　童髪　甘諸　上戸下戸　布袋和尚　河豚　結髪　黒歯并書眉　細男天舛　道灌咏　髪長　木綿草綿并蘿摩

目録だけでは余りたよりないので、左の二条の抄記を加えた。

× × ×

○道灌咏

伝ニ云、往昔大田道灌数万の軍勢を引率し、尾州鳴海潟を夜に入て通られける折節、俄に汐みち来て前後をわかたず、諸軍勢皆々途方を失ひしに、道灌古歌を誦せり。

近くなり遠く鳴海の浜千鳥声にて汐の満干をはしる

諸軍勢千鳥の声を逐て干潟に出、水難を遁れし事人口に膾炙せり。然るに此歌いかなる人の詠なるや、慕景集は道灌の詠草にて、東国（アヅマ）より三条銅駝坊のかり屋に至るまで道のくま〳〵記せしに、此歌見えず、鳴海の浦にてみつからよめる歌二首あり。

かへりみる里ははるかに鳴海潟沖ゆく舟もあとの白浪

おく露におもひみたれて終夜あはれ鳴海の鈴むしの声

予寛政甲寅の冬東国（アヅマ）へ下りし時、鳴海にしばし立休らひ、千鳥塚をも探り、此事たづねしに、卑（イヤ）しき賤の愚夫愚婦も能聞覚へたり。其後歴代の集を考れど、古歌には嘗て見当らず、いかなる人の詠なるや、爰に記して博古の人に譲る。

○武家十一統

室町鹿苑院殿の将軍たりし時、武家の故実を定んとて、今川左京太夫氏頼、小笠原兵庫介長秀、伊勢武蔵守満忠等に命ぜられ、天下の武家を十一統に分たる。○御一族、○大名、○守護、○外様、○評

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

定、○御供衆、○申次、○番方、○国人、○奉行、○末男。此十一統如何なる故実の制に拠れるにや。この将軍より天下の法改り、新奇の事も多かりき。南院別当を兼帯し、源氏の長者なるも、永徳三年正月より流例せり。又管領有て、細川山名の争ひ、遂には王城寺社仏閣公家の館、同宝、記録等に至るまで委く夜半の烟となる。世に是を応仁の乱といふ。吾朝の一大厄なり。礼楽征伐も武家より出て、古き律令を尋ねず。温直寛弘の和なく、威権雑伐（キケンサツバツ）を宗とするやうになれり。寛政芽（マ）々図（マ）に、小笠原貞宗月山と称し、又開禅寺とも云。此人唐僧清拙といへる者と相議して、諸礼を定むといへり。いかなる古礼を規矩とするや、其後元和二年正月朔日より、諸臣官位に応じ、烏帽子狩衣大紋を着し、無官の御家人も烏帽子素袍にて出仕するも、此時より始れり。

写本抄出は以上二条に止める。

さて本書の当時多く世人に読まれた事は、写本刊本も共に存する事でもわかるが、また反論も生じた事である。穂井田忠友著「高根おろし」二巻があって、其の誤謬を論議している。今其の序の一部を抄出する。興味のある方は同書二巻が国書刊行会本『百家随筆』二に収められているから同書を見られたい。

高ねおろし二巻は翁我先生南都にあつて、二月薪能の頃興福寺なる唐院の尊慧阿闍梨の許にて雅談の間に、院主彼の茅原定が漫録を取出して、此書博識の名挙にして、世称揚声耳に満てり。其実否如何と問はれし時、先生一目撃の下に、数条の斥排ありしかば、院主更に其の弁惑書あらん事を請はるゝに因て、帰家の後、不日筆を馳て贈られし也……。

とある。天保五年三月門生の序文である。

さて本書再刊にあたっては、内閣文庫写本及び刊本等を使用した。活字本としては、『日本経済叢書』十九、『日本経済大典』二九、『百家説林正編』上、『日本随筆全集』七、本大成一期十一巻等に依って流布している。

千原虚斎の略伝は、吉田祥朔編『近世防長人名辞典』にあるものが最も要領を得ているので、其れを掲げる。

茅原虚斎　名は定、一名元常（また玄定）、字は叔同、通称は丈助という。虚斎、長南、茅斎の号あり。長門大嶺の人。京都に住し居を釜座丸田町に占め、儒医を以て業とす。文事を好み著述数十種あり。就中、詩経名物集、茅窓漫録、同後編、東藩日記等の数種世に行わる。天保十一年正月廿六日歿す。年六十七。これより先天保六年その郷大嶺に筒井の碑を建て今に存す。

目次

三のしるべ……一
好古日録……五一
好古小録……一五三
茅窻漫録……二四三

（解題　丸山季夫）

之乃志為

三のしるべ

とりすべていふ事

をとゝしの春、道のしるべといふものをかきあらはして、ことし又、歌のしるべ、文のしるべと、ふたつものせしをとりしたゝめて、三のしるべとなし、すなはち書の名として、ひとつのさうしいできにけり。道はさらなり、歌も文も、いと〳〵やんごとなきすぢのまなびにして、そのしるべもたはやすからぬ事なるを、老ひがめる身になしえんやは。しかにはあれども、いまだ世にたよりよきしるべの書の見えざれば、うひ〳〵しきがたど〳〵しからん事の、心くるしさにものしたるになん。さて此みつのしるべよ。うひまなびの人に、此みちゆくにはかく心えて、かしこの道ゆくには、かう〳〵とさしをしへて、おほらかにしるべしたるのみにて、道すがらの事を、くはしくいひさとしたるにはあらず。其ゆゑは、すべてがくもんといふものは、みづから心とゞめちからいれて、ふるき書どもを見あきらめて、なしうるわざにしあれば、こまかにいひては、そのしるべにのみよりすがりて、おのづからちからいれざるやうになりて、なか〳〵に、まなびのためにわろからんと心してなりけり。見ん人、いひいたらぬくま〴〵のおほかるをなあやしみそ。

文政九年の秋

長門守従五位下大中臣藤井宿禰高尚

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.